
微熱

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微熱

【Nコード】

N3377S

【作者名】

那音

【あらすじ】

新しく出逢った君に、恋をした。

緊張する。

期待と不安。

冷静と焦燥。

新しい担任による宣言。

「入ってきて」と言われたあとも、なかなかその『一步』を踏み出せずにいた。

焦る鼓動に、静まれと無言で語りかけ。

震える右手に、収まれと念じる。

最初の一步ができてからは、簡単に中へと入れた。

視線が痛い。槍でも飛んできているかのようだ。

大勢に注目されることに慣れていない私は、誰とも目を合わせないよう意識をして、深く大きく、呼吸をひとつした。

担任の先生　　確か本田圭先生ほんだけいといった　　が生徒たちに背を向け、黒板に私の名前を書き始める。

縦書きで『内田篤子』、その右には丁寧に『うちだ あつこ』とルビまで振ってある。

不意に、本田先生が口を開く。

「さつきも言ったとおり、今日からこのクラスの一員になる、内田

篤子さんです。内田さん、自己紹介して」

『内田篤子』の部分だけゆっくり言ったのは、少しでも聞き取りやすいように、という配慮のもとだろう。

「内田……篤子です。よ……よろしくお願いします」

なんとか言い終えた。

私はまだお辞儀をしたままだったけど、本田先生は構わず話す。

「みんな、仲良くしてくださいね。」

じゃあ内田さん、席は……、そこ、香川さんの隣ね。香川くん、手を挙げて」

香川くんと呼ばれた男子生徒が、黙って手を挙げた。

「内田さん、彼の右の、あの空いている席があなたの席よ」

「はい……、ありがとうございます」

私は、彼 香川くん の腕を目印に、席へ向かう。

なかなかいい席だ。

「転校生紹介で時間もおしてるし、朝のホームルームは終わり」

やっぱり本田先生を隣で見ると座って見るのとでは全然違うな。前の方から号令がかかる。

みんなが立つのに追い付くように、私も立つ。

簡単に礼と挨拶をして、ホームルームは終わった。

終わった直後に、香川くんが私の机を軽く叩いた。

「内田、さん？ だよね。おれ、香川真一かがわしんいちって言うんだ。よろしく」

香川くんは不思議な人だった。

中学三年生にしては童顔だし。

肩までつくような明るい茶髪。

薄い翠色の、吸い込まれそうな瞳。

長い睫毛まつげ。

真っ白な肌と歯。

そしてそれによく映える、血色のいいくちびる。

聞き続けると脳とろまで蕩とろけてしまいそうな甘い声。

一目で、好きになった。

「香川くん……、よろ、しくね」

あれ、なんでだろ。

急に目眩めまいが……。

熱もあるかも。

私は派手に音をたてて机に項垂うなだれた。

傍から見れば、突っ伏して寝てるようにも見えたくもしれない。

「香川、なにしたんだよ？」

「なにもしてないよ」

「とにかく、保健室」

「おれが連れていく」

「おう香川、よろしく」

香川くんと他の男子のそんなやりとりが聞こえてた。

「内田さん？ 立てる？ 歩ける？」

一緒に、保健室行こう」

「そんな、悪いよ」

「そんな事ないよ」

「失礼しま……先生、でかけてるのか」

結局、「場所わからないだろ」と言われ、保健室まで連れてきてもらった。

「とりあえず、熱測ろうか」

香川くんは、体温計を私に差し出した。

私はそれを、わきにはさむ。

「ほんとにごめんね、わざわざついてきてもらって

「いいよ、授業サボれるし」

それに、香川くんは続ける。

「内田さんと仲良くなりたいし」

え？ え？ 今、なんと？

どうしよう、なにか言わなきゃ！！

「せ、先生いないし、ふたりきりだね」

私のバカア！！

「……」

「……」

きまずい。

沈黙が、悲しすぎる。

『ブブブブブブブ』

不意に鳴ったのは、体温計。

ナイス、体温計！！

私は体温計を抜き、そこに表示された数値を見る？

「何度？」

「大した事ないよ」

37度1分。

「微熱だよ」

(後書き)

続き、気になるかなー。

あ、ちなみに本田先生は女性ですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3377s/>

微熱

2011年10月8日18時25分発行